福音

2008年
8月
第八号

-目次-

クリスチャンの勇気
主日礼拝より

著者:那須容平

クリスチャンの勇気

神に頼らなければ何事も成すことのできない者がクリスチャンである。神に頼れば何事をも成すことのできる者もまたクリスチャンである。世にクリスチャンほどの弱い者はなく、またその人ほど強い者はいない。その人が、世の人々に臆病者と思われると同時に、人々が思ってもみなかった大胆な行動に出ることができるのは、その人の勇気と勢力とが人以外の、人以上の者から来るものだからである。

（内村鑑三信仰著作全集　所感　上　p121）

クリスチャンの勇気はどこからくるのか、それは神からくる、勇気は出すものではなく与えられる、と内村は言っています。私は本当にそう思いたい。私には、神から勇気を与えてもらうためにはこの世の信頼できるものを諦めて、こちらの方の勇気を選ぶ、ということに勇気が必要のようです。神に頼れば、、、といっても中々頼り切ることのできない自分がいます。神に頼らなくても生活できると思っているのかもしれません。この世では信仰のある人でもない人でも神は生かしてくださっている、待っていてくださる神に私は甘えているような気がします。もう少し待ってください、まずこの世がうまくいってから、と言う風です。聖書の中にイエスに付いていきます、と言った人が「その前にまず、仕事を終わらせてから、、、」という人がでてきます。また、「あなたは本当に救世主ですか、それとも別の方を待たなければなりませんか」とイエスに尋ねた人もでてきます。その人は救世主―キリスト―とはもっと、社会的に大きな全世界の人々が注目するような行いをする方だと思っていたようです。

一言で神から勇気をいただくといっても、すんなり従っていく姿勢になれない罪があります。ここに私は自意識の強さ感じます。一度は自分の無力さ、みにくさを味わい、救世主であるキリストが自分の心の中に来てくださったことで、真の頼り所を見つけました。それは実体験を通してあらわされた紛れもない事実です。その後、救世主キリストがこの世に現われた、救いをもたらされた、そういう目で物事を見ると、今までと違という自慢の心をこの議員は少なからず持っていた。

他人の自慢はすぐにわかるものです。信仰生活の長い人でも人を裁く心・自分は大丈夫という思いが突如湧いてくるのかもしれません。キリスト教信仰とは会得・体得するのではなく、絶えず求めていくことのようです。

ファリサイ派の人は『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

ルカによる福音書18章11-14節

発行人: 那須 容平　主日礼拝: 毎週日曜日 10:30～(自宅)
HP: www.geocities.jp/ekklesiajapan
E-mail: ekklesiajapan@gmail.com

するな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ」と言った。すると議員は、「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。

ルカによる福音書18章20-21節

この人は子どもの時から律法を守ってきたと自分では考えていて、さらにイエスの教えを守りたいと思っている人のようです。この人は真面目な人であり、自他ともに認める立派で道徳的な人であったようです。

しかしイエスが見抜いたことは、律法を守ってきたという自負心は心の傲慢さであるということです。

女性と関係を持ちたいと欲する心を持つことは姦淫することと同じあり、誰かを憎むという気持ちは殺すことに繋がっていく感情であるし、人の能力をうらやんだり、神殿の境内で物の売り買いをしたり、神の神殿を用いて商売したりすることは盗むことである。さらに、偽証に関しても、人は大小問わず嘘をつき、また実際よりもすぐれているように言ったり見せたりすることである。（文章を書く時にでも技巧さは要らない。拙くても嘘、偽りなくそのままの気持ちを書けることが一番良いことである。）

それなのに「自分はずっと守ってきています、イエス様」

った世界が広がっていることがわかりました。しかし、私は前とは違うところだけれども同じように自分につまずいているのだと思います。前と現在の違いとで言えば、救いの実体験を通して、「どうか私をあなたのそばに捉えつづけてください」と思うことかもしれません。矢内原忠雄の文章を引用します。

――――私に明白な二つの自覚がある。

一つは、私は罪人であって、キリストの十字架の下に立たねば生きていけない人間であるということである。これは限りなく恥ずかしい自覚であるが、事実だから仕方がない。この自覚は私を世界の誰よりも謙遜に、誰よりも柔和にさせる。

：にも関わらず、私にはこれと全く相反したようなもう一つの自覚がある。それは、私は日本の柱であって私を倒す者は日本を倒すものであるという自覚である。こう言えば人々は救いがたい傲慢と排斥するであろう。しかし、私は聖書の真理の保持者として立つ時、この自覚を自ら払いのけようとしてもまた沸き上がって来るのである。

：私は罪人の頭であるという自覚と、私は日本第一の大人であるという自覚とは、一見相反するもののようであるが、私においてはともに真実である。それはこの二つの自覚は、一つの底流の両端における湧出口にほかならないからである。これを結ぶ流れはキリストである。キリストに結ばれる時、私は自分の罪を知る。しかしキリストによって私の罪を赦された時、私は日本第一の大人であることを自覚するのである。

：私の人生はこの自覚の上に立っている。この自覚を私に教えてくれたものは聖書であり、聖書を私に教えてくれた人は私の善き師であった。諸君の若き日を空しく過ごすことなく、善き師に付いて永遠の真理を学ばれよ。これは諸君の人生を意義ある生涯にするために最も必要なことである。――――(矢内原　忠雄全集第十七巻)

注:「日本第一の大人」とは、日本で最も重要な人間や人物のこと。

この「罪人の頭であるという自覚」と、「日本第一の大人であるという自覚」は、内村の言う「世にクリスチャンほどの弱い者はなく、またその人ほど強い者はいない。」と通じるものがあると思います。私も自分の弱さとキリストの強さを感じます。

私は、どんな人でも自分は弱い者だと自覚することは必要なことだと思います。自分という皮を一枚ずつむいていくと何が最後に残るのでしょうか。

内村は「神に頼らなければ何事も成すことのできない」と言いましたが、「～がなければ、：することができない」ものは何でしょうか。例えば、お金がなければ、時間がなければ、元気でなければ、容姿がよくなければ、安全が保証されていなければ、友達がいなければ：できない、などが考えられると思います。

こういった大切なものが一つずつなくなっていって丸裸の自分に残されるものは、実は何もないのではないでしょうか。地位も名誉もなく、記憶はなくなり、理性もなくなるかもしれません。

私は神を背にして、「何もない」状況を知らされた。しかしこれは当然であったと思います。私はここに自分が全くの弱い者であることを痛感させられたのです。しかしもし、キリストに結ばれるなら、それは、「何もない」ものの流れの中で、その流れの反対の側に、豊かなものと結びつくのです。その流れを渡ってこそ、本当の豊かさと出会うことができるのだと思います。

主日礼拝より

7月6日　ルカ伝18：15～17 「幼な子と神の国」	**7月13日 ルカ伝18：18～23** **「天に富を積む」**
7月20日　ルカ伝18：24～30 「神の国に入る」	7月24日　ルカ伝18：31～34 「死と復活の予告」

神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。

ペトロの第一の手紙　1章3～4節

ある議員がイエスに、「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねた。

ルカによる福音書18章18節

冒頭に「ある議員が」とあります。ルカによる福音書では「ある議員」、マタイによる福音書では「金持ちの青年」と書かれています。どちらも同一人物を指しているようです。

イエスは『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証